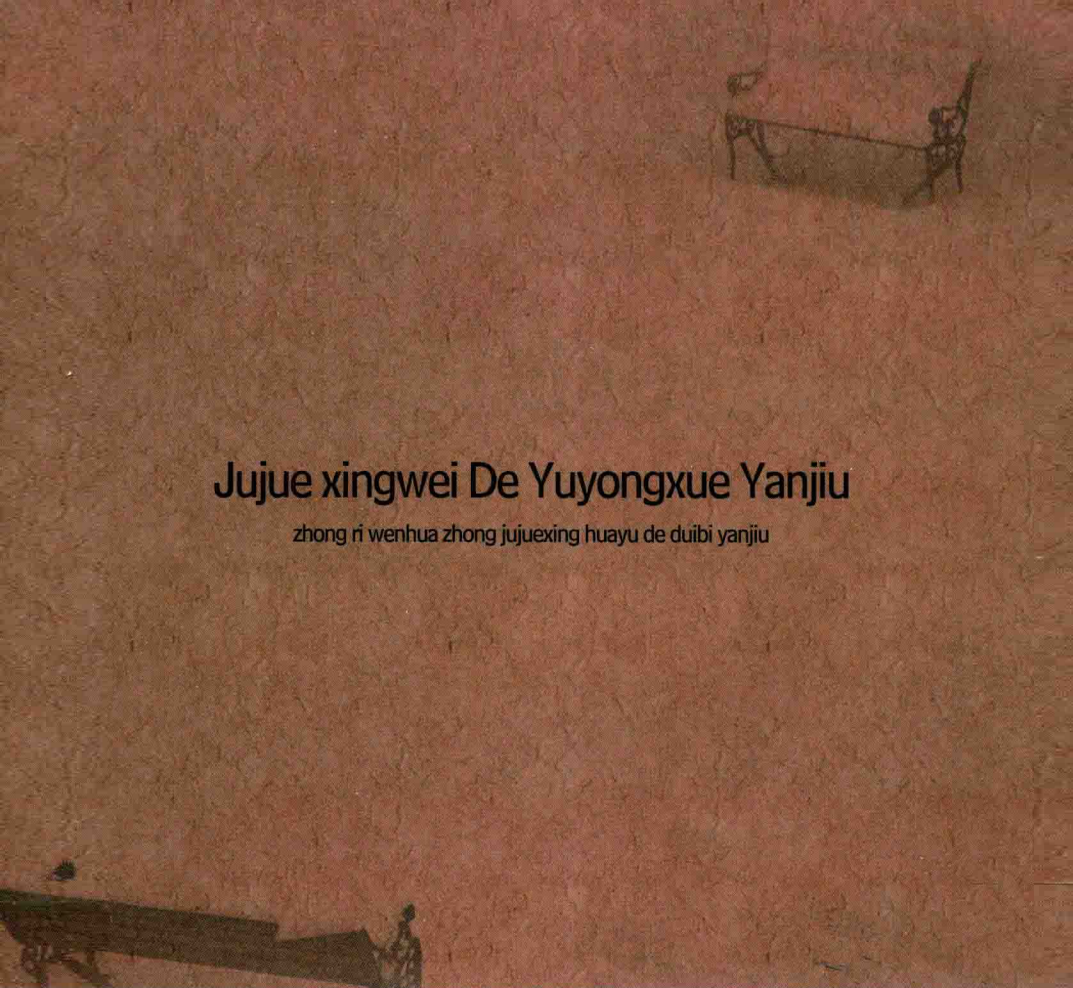




Jujue xingwei De Yuyongxue Yanjiu

zhong ri wenhua zhong jujuexing huayu de duibi yanjiu

拒绝行为的语用学研究

中日文化中拒绝性话语的对比研究

刘珏◎著

南开大学出版社

教育部人文社会科学研究青年基金项目资助（项目编号12YJC740065）

广东工业大学博士基金项目资助（项目编号405120055）

拒绝行为的语用学研究

——中日文化中拒绝性话语的对比分析

日中断りについての語用論的研究

刘 珏 著

南开大学出版社

天 津

图书在版编目(CIP)数据

拒绝行为的语用学研究：中日文化中拒绝性话语的
对比分析 / 刘珏著. — 天津：南开大学出版社，
2013.12
ISBN 978-7-310-04420-7

I. ①拒… II. ①刘… III. ①语用学-对比研究-汉
语、日语 IV. ①H13②H363

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第016094号



版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人：孙克强

地址：天津市南开区卫津路94号 邮政编码：300071

营销部电话：(022)23508339 23500755

营销部传真：(022)23508542 邮购部电话：(022)23502200

※

唐山天意印刷有限责任公司 印刷

全国各地新华书店经销

※

2013年12月第1版 2013年12月第1次印刷

210×148毫米 32开本 8.875印张 2插页 221千字

定价：20.00元

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022)23507125

序

拒绝行为是一种对面子威胁程度极高的言语行为，其策略的选择直接关系到谈话双方人际关系的益损。研究拒绝话语的选择模式对于构建和谐的人际关系，尤其是克服跨文化交际摩擦意义重大。虽然言语行为理论和面子理论长期以来一直试图阐明该行为的性质特点，但由于其话语选择极大程度上受到上位发话行为的语用策略的制约，且言语标识不明确，语料搜集难度大，因而一直未见有系统的研究。20 世纪 90 年代，汉日语拒绝行为逐渐引起学术界关注，许多学者从语际语用学、跨文化对比和汉日语本体研究等多个角度作了诸多有益的探索。这些研究通过量化分析手法较系统地描述了汉日拒绝行为的表层策略特征，并对部分典型的话语结构进行了实证性研究，为进一步分析相关问题提供了思路和方法。虽然越来越多的学者意识到，研究汉语和日语的拒绝行为时，单独考察拒绝行为的执行方是非常局限的，必须建立起一个连续动态的研究体系，考察谈话双方的互动才能阐明两种语言话语选择的基本规律和特征。但由于受到拒绝行为复杂性的困扰，以及语料的局限，使得相关研究难以完全跳出先设计某种场景、然后进行语义公式统计的思维模式。

本书作者通过梳理汉语和日语拒绝言语行为的现有研究成果，提出基于语料库的动态分析这一新视角，为系统研究该行为提供了新的理论依据。作者依据维索尔伦（Jef Verschueren）“顺

应论”的理论框架，在不改变现有的语用学研究体系的前提下，既可以从微观层面有效解决话语选择模式，构建所关心的语用表层策略问题，又可以较好地实现对该领域原有研究成果的继承和发展。同时，在研究对象的范围、考察前提等方面大胆突破，把拒绝行为看作一个连续的动态过程，在考察对象上不仅涵盖一次性拒绝行为，也包含反复多次的拒绝行为；在实际考察中，不仅考察拒绝意图的表达策略，也考察话语选择的传达效果，从而突破了孤立考察特定语境下的单次拒绝行为的传统研究方法和思维模式。本书在前期研究的基础上，对汉语和日语中拒绝行为的引发行为、拒绝行为实施者的交际意图、谈话中交际意图的表达效果等进行分析。作者提出的诸多观点突破了以往研究的理论瓶颈，提升了这一领域内实证性研究的理论性和系统性。

喜闻刘珏博士的论著即将付梓，我深感欣慰。学海无涯，勤奋为舟。期待作者自强自勉，再创佳绩。

澳门大学日本研究中心主任、教授、博士生导师
陈访泽

2013年4月3日于澳门氹仔

前 言

本研究以“顺应论”的理论框架为依托，借助“语境”、“动态过程”、“意识凸显程度”三个考察指标，描述了汉日拒绝性谈话活动的连续动态过程，阐明了两种语言共有的动态选择机制。

本研究在以下四方面做了与以往不同的探讨：

- A. 本研究将汉日拒绝行为的引发行为也纳入研究对象范围，把拒绝性谈话活动作为一个连续的动态的过程进行考察，界定了以往未能明确提出的汉日拒绝行为的引发行为类型。
- B. 本研究否定了以往将拒绝意图作为汉日拒绝话语唯一交际意图的考察前提，通过考察汉日拒绝性谈话中常见的交际意图复合现象，阐明了汉日拒绝话语选择的意图性。
- C. 本研究的考察对象既涵盖了以往研究的一次性拒绝谈话，也包括了多次反复性拒绝谈话，阐明了汉日拒绝性谈话的磋商性。
- D. 本研究不仅考察了汉日拒绝意图的表达方式，还考察了汉日拒绝性谈话中交际意图的传达效果，从而阐明了谈话参与者所做出的有意识的话语选择活动是如何推动拒绝性谈话发展的。这是以往研究所没有涉及的角度。

通过本研究的考察，得出了如下结论：

汉语和日语在请求、邀请、提议、提供、劝说、道歉、要求说明、命令这八种场景下有可能引发产生拒绝行为。汉日拒绝性谈话不仅是拒绝意图的表达过程，而且经常同时复合多种交际意

图,如“负面情绪表达意图”、“保全领域意图”、“保持人际关系意图”以及“博取对方同情意图”。两种语言中,拒绝意图的产生机制非常相似。

当谈话的初始阶段中,谈话参与者之间的关系处于平衡状态时,拒绝意图产生于对上位话语的理解过程,本研究称之为“核心性拒绝意图”。产生这种核心性拒绝意图的主要原因在于,谈话参与者被激活的认知语境中含有不可调和的矛盾性因素。这种矛盾性因素的具体内容因拒绝行为的引发行为种类不同而各异。

汉日拒绝性谈话中,“拒绝”明示意图产出受阻的情况较为普遍,这是由于“保持人际关系意图”和“博取对方同情意图”产生了明示意图而导致的。这种现象从拒绝话语的表层结构来看,具体表现为拒绝性施为动词的不使用、具体的信息提供、感谢性话语、道歉性话语、上位话语信息的重复、信息要求等。换言之,当说话人不选用其他话语结构,仅使用由拒绝性施为动词构成的拒绝性话语来实施拒绝行为时,说明“拒绝意图”明示意图的产出过程阻止了“保持人际关系意图”、“博取对方同情意图”的明示意图的产出过程。

本研究把由其他交际意图所引发产生的拒绝意图称为“次生性拒绝意图”,而将这类引起拒绝意图产生的交际意图称为“核心性意图”。这类核心性意图是否产生明示意图将在很大程度上影响到汉日拒绝性谈话中的意识性选择行为。当核心性意图产生了明示意图时,谈话开始前和谈话进行中所发生的不平衡状况是诱发“负面情绪表达意图”和“保全领域意图”的主要原因,因此发言人的话语选择重点往往放在这两种意图的表达上。在汉语和日语中,由于这类场景下的拒绝行为多被作为表达负面情绪和保护自我领域的手段而使用,所以阻碍了“保持人际关系意图”和“博取对方同情意图”的产生。

在汉语和日语中,这类由负面情绪引发的拒绝行为多选用 FTA

度较高的话语，比如不说明理由的否定性意志表达等。当谈话者双方同时选用复合有“负面情绪表达意图”或“保全领域意图”的话语进行谈话活动时，谈话往往呈现出僵持状态，最终多会给人际关系带来较大损害。当“负面情绪表达意图”与“保全领域意图”同时复合于发话行为时，行为要求者所作出的消除负面情绪的努力常常会被对方看作是对自己领域的侵入性行为，也容易使谈话陷入僵持状态。此时，行为要求者往往不得不做出让步，放弃要求以打破谈话僵局。

在汉语和日语中，“保全领域意图”如果没有产生明示意图，发话人的话语选择重点多放在“拒绝意图”和“保持人际关系意图”的传达上。发话人通过具体的信息提供、感谢性话语、道歉性话语、上位话语信息的重复、信息要求等，有意识地弱化“保全领域意图”和“拒绝意图”，从而减少由拒绝行为所带来的 FTA 程度。这种弱化努力越强，就越容易使对方反复提出要求，最终形成“积极的行为要求放弃型话段”或“行为要求承诺型话段”。反之，这种弱化努力越小，话语选择就会越偏向于“保全领域意图”和“拒绝意图”的表达，从而容易形成“僵持型话段”或“消极的行为要求放弃型话段”。发话人的这种有意调整 FTA 程度的行为只有在当发话人没有产生“负面情绪表达意图”时才有可能实施。总之，“次生性拒绝意图”的谈话过程中，“负面情绪表达意图”是否产生明示意图直接关系到是否产生“保持人际关系意图”和“博取对方同情意图”。如果“负面情绪表达意图”产生了明示意图，则阻碍了“保持人际关系意图”和“博取对方同情意图”的产生，此时汉日拒绝话语的 FTA 程度较高；反之，拒绝话语的选择则注重如何减少 FTA 程度。

作者

2013 年 3 月

前書き

本研究は、「順応理論」の枠組みの下で、「コンテキスト」「動的プロセス」「意図の顕在化程度」という三つの観察指針を用いて、日本語と中国語との断り談話の連続的・動的なプロセスを浮き彫りにし、両言語が共有する断り談話にかかわる動的選択メカニズムを解明した。

本研究は次の四点において従来の研究と異なっている。

- A. 本研究では、日本語と中国語との断り行為の誘発行為も考察に入れて、断りにかかわる談話活動を一つの連続的・動的なプロセスとして研究することによって、従来漠然としていた日中断り行為の誘発行為の種類を明白にした。
- B. 本研究では、断る意図が日中断り表現の唯一の伝達意図だという従来の捉え方を否定し、日中断り談話における伝達意図の複合現象も考察に入れることによって、日中断り表現選択の意図性を解釈できた。
- C. 本研究は、従来の研究対象である一回で終わる断り行為のほかに、繰り返しの断り行為も対象に入れることによって、日中断り談話のインタラクション性を解明した。
- D. 本研究は、断る意図の表出方法だけではなく、断り談話における伝達意図の伝達効果も考察に入れて、談話参加者の意図的な表現選択が如何に談話の展開に影響を与えるかを解明した。これは、今までの研究が触れなかった角度である。本研究を通して、次の結論を得た。

日本語と中国語では、依頼・誘い・提案・提供・勧め・詫び・説明要求・命令という八つの場面において、断り行為が発生する可能性がある。日中断り談話は断る意図の表出のみならず、場合によって「マイナスの感情表明意図」「領域保全意図」「人間関係の保持意図」「相手からの配慮意識の喚起意図」も同時に複合されることが多く見られる。断り談話にかかわる意図の産出メカニズムは、日中両言語が極めて高い共通性を示している。

談話は談話参加者の間の関係がバランスの取れた初期状態で行う場合、断る意図は上位発話に対する理解プロセスから産出する。本研究では「中核的な断る意図」と称する。談話参加者の認知コンテキストに調和できない矛盾の要素が活性化されたことは中核的な断る意図の産出の誘因となる。その矛盾的な要素の具体的な内容は、断り行為を誘発する行為の種類によって異なる。

日中断り談話においては、「人間関係の保持意図」や「相手からの配慮意識の喚起意図」の表現意図の産出は断る意図の表現意図の産出をブロックする傾向が強い。その傾向が断り表現の表層的構造から見ると、断る意図を表出する遂行動詞の代わりに、具体的な情報提示・感謝表現・詫び表現・上位発話の情報の重複・情報要求などを用いることとなる。逆に考えると、遂行動詞から構成された断り表現のみ用いて断り行為を実行する場合、「人間関係の保持意図」や「相手からの配慮意識の喚起意図」の表現意図の産出は断る意図の表現意図の産出にブロックされたと考えられる。

他の伝達意図から副次的に誘発された断る意図は、本研究では「副次的な断る意図」と称するが、このような断る意図を誘発する伝達意図を「中核的伝達意図」と称する。断る意図を誘発した中核的な伝達意図にかかわる表現意図は産出するかどう

かによって、日中断り談話における意図的な選択は大きく影響されるのである。表現意図が産出された場合、談話開始前や談話進行中に発生したアンバランスの状況は「マイナスの感情表明意図」や「領域保全意図」を誘発する重要な要素であるため、発話者の表現選択は「マイナスの感情表明意図」と「領域保全意図」の表出に重点を置いている。日本語と中国語においては、この場合の断り行為は、マイナスの感情表出や領域保全のための手段として実行されることが多く、「人間関係の保持意図」や「相手からの配慮意識の喚起意図」にかかわる表現意図の産出がブロックされる傾向が強い。

このようなマイナスの感情に駆けられて実行された断り行為には、日中両言語ともに、理由を説明せずに否定的な意志を表明するという FTA 度の高い表現選択が多く見られる。談話参加者双方が同時に「マイナスの感情表明意図」や「領域保全意図」の複合された表現選択を実行する場合、談話は行き詰まりになりやすく、最終的に人間関係に大きなダメージを与える傾向が高い。「マイナスの感情表明意図」と「領域保全意図」と同時に複合される場合、行為要求者から発したマイナスの感情を解消しようとする努力は、相手に私的領域への侵入行為として捉えられることが多く、談話を膠着状態に導きやすい。このような膠着状態を打開するために、行為要求者がやむを得ずに譲歩し、要求を放棄する展開となりやすい。

「領域保全意図」にかかわる表現意図が産出されない場合、発話者の表現選択は「断る意図」と「人間関係の保持意図」の表出に注意を払うようになる。具体的な情報提示・感謝表現・詫び表現・上位発話の情報の重複・情報要求などの表現の使用によって、「領域保全意図」や「断る意図」が弱化され、断り行為の実行による FTA の度合いも次第に減少できる。このような

弱化する工夫が大きければ大きいほど、相手からの繰り返しの要求行為を引き起こしやすく、最終的に「積極的な行為要求放棄型話段」や「行為要求承諾型話段」を形成する。逆に、このような弱化する工夫が小さければ小さいほど、表現選択が「領域の保全意図」や「断る意図」の表出に偏ってくるため、「膠着型話段」や「消極的な行為要求放棄型話段」を形成しやすくなる。このような FTA の度合いに対する発話者の意図的な調整行為は、「マイナスの感情表明意図」が生成しないことを前提としている。要するに、断る意図が副次的な伝達意図として産出される場合においては、「マイナスの感情表明意図」にかかわる表現意図の産出は、「人間関係の保持意図」や「相手からの配慮意識の喚起意図」の産出に大きく左右している。前者が表出される場合、後者はブロックされ、両言語の断り表現の FTA 度が高くなる。前者が表出されない場合、後者にかかわる表現意図が産出され、断り表現の FTA 度を減少する工夫が多く見られる。

目 次

序	1
前言	3
前書き	7
 序章	1
0.1 本研究の位置づけと研究目的	1
0.2 データの収集と研究方法	3
0.3 本研究の構成	5
 第1章 本研究の理論的枠組み	7
1.1 順応理論	7
1.1.1 理論の提出	7
1.1.2 三つの核心的概念	8
1.1.3 四つの研究角度	10
1.1.4 ストラテジーの選択	15
1.2 本研究での捉え方	17
1.2.1 断り行為の「連続的・動的プロセス」	17
1.2.2 日中断り行為における三段階	19
1.3 断り談話にかかわる認定基準	21
1.3.1 「発話行為論 (speech-act theory)」	21
1.3.2 断り行為の成立条件	24
1.3.3 発話機能の認定基準	27

第2章 課題提起と本研究の射程	33
2.1 先行研究の概観と残された課題	33
2.1.1 先行研究の概観	33
2.1.2 残された課題	36
2.2 本研究の研究課題	38
2.2.1 関連概念の再整理	38
2.2.2 各段階における課題の設定	40
 第3章 日中断り行為における上位発話行為の伝達効果	
—意図の生成メカニズムを中心に—	43
はじめに	43
3.1 問題提起と本章の目的	44
3.2 「断りの誘発行為」とは	46
3.3 断り談話における伝達意図の複合現象	52
3.4 断りの発話行為における表現の意図的選択	58
3.4.1 発話行為における表現と意図との位置づけ	58
3.4.2 断り行為における中核的伝達意図と副次的 伝達意図	63
3.5 中核的断る意図の生成メカニズム	66
3.5.1 認知コンテキストの考察指針	66
3.5.2 依頼・命令に対する断る意図の生成	78
3.5.3 中核的断る意図の生成プロセス	83
3.6 副次的断る意図の生成メカニズム	92
3.6.1 談話開始前のアンバランス状況による産出	93
3.6.2 談話進行中のアンバランス状況の発生による産出 	96
3.7 断りの表現意図の生成	101
3.8 まとめ	108

第4章 真実的断り行為における意図の表出

—断り表現の選択行為の意図性を中心に—	112
はじめに	112
4.1 問題提起と本章の目的	112
4.1.1 日中断り表現の意味構造についての研究	113
4.1.2 断りの表現構造についての研究	115
4.1.3 本章の目的	116
4.2 日中「断る意図」の表出	120
4.2.1 断りの遂行動詞	120
4.2.2 慣用表現	122
4.3 「マイナスの感情表明意図」の表出	128
4.3.1 理由ぬきの否定的意志表明	128
4.3.2 談話前提の否定	132
4.4 「領域保全の意図」の表出	134
4.4.1 私的情報提供	134
4.4.2 話題変換	136
4.4.3 否定的意志の強調	138
4.5 「人間関係の保持意図」の表出	143
4.5.1 感謝表現と詫び表現	143
4.5.2 具体的な情報提供	146
4.6 「相手の配慮意識の喚起意図」の表出	152
4.6.1 上位発話の情報の重複	152
4.6.2 情報要求	154
4.7 まとめ	158

第5章 断り談話における意図の伝達効果

—動動的視点から—	162
はじめに	162
5.1 問題提起と本章の目的	163
5.2 日中断り談話の話段	166

5.2.1 「話段」とは……………	166
5.2.2 日中断り話段の類型……………	167
5.3 「膠着」型断り話段における意図の顕在化……………	168
5.3.1 対峙の展開パターン……………	169
5.3.2 逆転展開パターン……………	185
5.4 「行為要求放棄型」断り話段における意図の顕在化……………	192
5.4.1 「膠着—放棄」の展開パターン……………	192
5.4.2 逆転の展開パターン……………	217
5.5 「行為要求承諾」型断り話段における意図の顕在化……………	218
5.5.1 「人間関係の保持意図」と「相手の配慮 意識の喚起意図」との伝達効果……………	218
5.5.2 領域の保全意図の伝達効果……………	227
5.6 まとめ……………	232
終章 結論と今後の課題……………	236
はじめに……………	236
6.1 本研究の結論……………	237
6.1.1 日中断り談話における伝達意図の産出 メカニズム……………	237
6.1.2 日中断り談話における意図表出の選択 メカニズム……………	238
6.2 第二言語教育への示唆……………	242
6.3 今後の課題……………	243
参考文献……………	245
付録……………	259
後書き……………	265

序 章

0.1 本研究の位置づけと研究目的

1980年代半ばから、中間言語語用論をめぐる研究が盛んになり、発話行為についての研究分野においても、新たな考察視点が見られ、分類を中心とする従来の角度から異文化比較研究という新しい視点へ移転する傾向が現れてきた。断りの発話行為についての本格的な研究はこのような背景の下で行い始めたが、1990年代以降から盛んになり、数多くの成果が挙げられてきている。

今まで日本語と中国語との断り行為を対象とした研究は、主に日中断り表現の意味構造、断りのストラテジー、第二言語学習者のプラグマティック・トランスファー^①及び断り表現とポライトネスとの関連分析に重点が置かれている。先行研究は、静的・記述的な視点から日本語と中国語との断り行為の表層的特徴を解明したが、次の四つの問題点が挙げられる。

A. 断り行為の上位発話行為が漠然であること；

①プラグマティック・トランスファー：pragmatic transfer、語用論レベルの移転の意味で、第二言語学習者が、目標言語で発話行為をとる場合、母語の語用論的知識を使ってコミュニケーションを行う現象をプラグマティック・トランスファーと呼ぶ（藤森、1994）。